

「終末期医療を考える会」代表の宮本医師

自分が望む最期 文書化を

道内の医療、介護関係者でつくる「高齢者の終末期医療を考える会」（札幌）が今年で10年を迎えた。節目に開かれた8月の講演会では、医師で代表を務める宮本礼子さん(67)が「高齢者終末期医療はこの10年でどう変わったかー自分が望む最期を迎えるために」と題し、高齢者自身が望む終末期医療について示す文書「リビング・ウィル」を作るよう呼び掛けた。

(熊谷知喜)

講演会は6日、札幌市内の会場とオンラインで開かれた。約350人が参加した。宮本さんは「会の設立は2007年、スウェーデンの認知症グループホームを視察したことがきっかけ」だと説明した。一方、当時の日本では点滴や経鼻栄養などが行われ、嫌がる高齢者には手足や体を縛る「身体拘束」が行われていたという。宮本さんは「スウェーデンのような終末期医療の考え方を、日本にも広めたいと思った」と振り返った。

宮本さんは江別市にある病院で、認知症疾患医療センター長として現場に立つ。「患者からは『延命治療を受けてまで生きたいとは思わない』『自然に死な

やかな最期を迎えていた』と説明した。



会場のほか、オンラインでも行われた「高齢者の終末期医療を考える会」の講演会

「判断能力あるうちに家族の了承得て」

リビング・ウィルの記載例

- 私の傷病が、現代の医学では不治の状態であり、既に死が迫っていると診断された場合には、ただ単に死期を引き延ばすためだけの延命措置はお断りいたします
- ただし、この場合、私の苦痛を和らげるためには、麻薬などの適切な使用により、十分な緩和医療を行ってください
- 私が回復不能な遷延性意識障害に陥った時は、生命維持装置を取りやめてください



※日本尊厳死協会の資料を基に作成

「判断能力あるうちに家族の了承得て」という厚生労働省の統計結果も示した。その上で、高齢者が自身の希望を家族をはじめ医療、介護関係者に伝える方法として「リビング・ウィル」を紹介した。日本尊厳死協会の資料を示しながら掲載している。

人任せにしないことが大切



宮本礼子さん

期医療のあり方を考える講演会を開くことを中心に活動している。

高齢者の終末期医療を考える会は2012年6月に設立した。道内の医療、介護関係者11人が世話人となり、コロナ禍で中止した20、21年を除き年1、2回、高齢者の終末

医療のあり方を考える講演会を開くことを中心に活動している。

講師は高齢者の終末期医療に取り組み医師や訪問看護師らが務め毎回、一般市民を含む300~400人が参加する。ホームページ(https://www.shuumatukiryoku.com/)も開設し、終末期医療に関する医師のコラムなどを掲載している。

代表の宮本礼子さんはこの10年を振り返り「介護保険制度の後押しもあり、介護施設では穏やかに亡くなる高齢者が増えてきた」と指摘。その上で「高齢者自身が望む最期を迎えるには、家族や医療、介護関係者任せにしないことが大切」と強調する。